

---

# 天蓋のバルテノン

音風 奏（雅董杏みつ）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天蓋のバルテノン

### 【Nコード】

N6871Z

### 【作者名】

音風 奏（雅董杏みつ）

### 【あらすじ】

幼馴染みとの、若干変だが平凡な人生を過ごしていた俺。片思いの人との、平凡だけど変な人生を過ごしていた僕。二つの運命が交錯したとき、俺達の世界が変わった。二人の人生が重なったとき、僕達の戦いは始まった。神の力を操り、神へと近づく俺達。神に選ばれて、神同士で戦う僕達。その先の結末は、神のみが知る。

## 開封／不在

「はい、リンくん」

幼馴染みの涼子の家の玄関で、彼女から渡されたのは、小さな箱だった。

「ありがとな。……これ、今あけても？」

「うん、もちろんいいよ」

一度彼女の許可を得て、その包みを丁寧に開ける。と、

「おっ、コレは……？」

金色のネックレスのようなものが、その中の小さな箱に入っていた。箱が透明な作りになっていて、それを開けなくても中身が分かるようになってる。

「えへへ、リンくんがオシャレに興味ないのは知ってるけど、こういうのもたまにはいいかな、って……」

そういう涼子の言葉を聞きながら、俺はそのネックレスをじっくりと眺めてみた。……これ、どう見ても安物じゃないぞ……？

「お前これ、どこで？」

俺がそうきくと、涼子は

「ないしょ」

とだけ言っつて、ちろつと舌を出した。

「改めて、お誕生日おめでとう」

……そう。今日は俺の誕生日なんだ。高校一年生になってもう半年ほど経って、比較的過ごしやすい気候である今。俺はこれで十六度目の誕生日を迎えたのだ。

「ああ、ありがとな」

相変わらず、何があっても俺の誕生日には必ずそばにいてくれる彼女を見て、俺は自然と顔が綻ぶ。……不思議な話だが、それまで

三日間ほど音信不通だったのに、今日ここで会えたというだけで、彼女はこれからもずっと俺のそばにいてくれると思っっている。根拠はなくても自信はある。その自信がどこから来ているのかは、俺にもわからないがな。

涼香は俺の顔を見て、満足そうな笑みを浮かべた。

「じゃあ、今日は遠慮しないでどんどん食べてね!」

そして、その場から体をずらして、俺をその奥へと促した。  
と、

「うおっ!?!」

そこには、テーブルを埋めつくほどの大量の夕食が用意されていた。涼香独特の形をした唐揚げに、色とりどりの野菜サラダ、光沢でも持つてるんじゃないかと思うほどに輝くデミグラスソースがかかった、目を疑うほどきれいに焼きあがっているハンバーグなど。それら全てが、俺と涼子の二人分、置かれている。

「……これ、全部お前が?」

料理が得意なのは知っていたが……。

「えへへ、はりきっちゃった」

いや、はりきったとか言うレベルで済むモノか、これは? 世の中見た目より中身というが、中がよければ外もいいという事もあり、これはどうみても後者の部類だろう。彼女の料理が美味しいのは俺の舌がよく知っているが、それ以前にもう見た目だけで充分に美味そうだ。

「今日は、ほかに誰もいないからね。わたし、ちよつとがんばりすぎちゃったかも」

親同士がとても親密な仲にある俺たちは、毎年片方の家族の誰かの誕生日には、二家族合同で盛大に誕生日会を行うのがルールになっていた。が、涼子の両親は仕事の急用でどこかに行ってしまったし、俺の両親と妹も、妹の塾の合宿に参加している。ので、今年は俺たち二人だけなんだ。

それにしあって、この量とクオリティはあまりにも豪華すぎる。

とは思つものの、俺はどちらかというとなんかことより、彼女の行為自体がとても嬉しかった。俺のためにこんな用意をしてくれた彼女に対する感謝の気持ち、俺の中からあふれ出そうなくらい、嬉しかったんだ。

だから、

「すげえ！ マジですげえよ！ ありがと涼子！」

なんかこう、つい興奮してしまうのなあ！ うえーい！

「これ、俺のために作ってくれたんだろ？」

「もちろん、そうだよ」

興奮という名のジェットエンジンに火が付いた。

「うはっ！ 涼子、マジでありがと！」

俺はたまらなくなつて涼子の手を握り、彼女の目を見つめる。やべえ、笑顔がとまらない！ どこぞ変態みたいだ。が、いまはそれよりメシだ！ うほおおお！

「リンくん……。えへへ、嬉しいなあ」

涼子が照れた。頬を赤らめるとその顔がリングゴみたいで、でもそんなことよりやっぱり俺はメシに目が行ってしまい、

「んじゃ、いただきまーす！」

勝手に椅子に座り、箸を取った。さあ食べるぞ！ うおお！

「あつ、リン君、先に乾杯を」

「（ごっくん）うんんんんめえええええええええええええええええ！ 最高だ！」

「……まあ、いつか」

涼子のうますぎるメシを平らげた俺は、しばらく涼子と駄弁つたり、一緒にテレビゲームをしたりして、気が付けば、日付の変わる一時間前になつていた。

よく考えれば涼子に誘われたのは七時前で、つまり四時間以上もお邪魔していたわけだ。楽しい時はすぐ時間がたつものだと改めて

思う。

流石に日を跨ぐまでお邪魔するわけにも行かないので、俺は涼子宅を後にした。涼子は最初、「一人は怖い」と言い出して俺の帰宅を拒んでいたのだが……。

「うわー、久しぶり」

成り行きで、同行することになってしまっていた。

「リンくん

の家に来るの、半年ぶりかな？」

俺の懸念もいざ知らず、彼女は無邪気に俺の家を眺める。……四

人家族が暮らすには丁度いいってだけの、ただの一軒家なんだがな。

って、そんなことはどうでもいいんだ。問題は、

「お前、ホントにウチで泊まってくつもりか？」

彼女が、俺の家で泊まっていくつもりでいることだ。

「だって、リン君帰っちゃうし、わたし、一人でお留守番するの怖いし……」

彼女が少し引つ込み思案気味で心の弱い子ということは知っているが、まさか高校生にもなって一人で留守番が怖いとは……。女の子なのだから仕方ないと言ってしまえば話は早いが、今時の「女子」というのは怖いどころか、自宅に一人でいることを幸福とする奴が大多数だろう。だからむしろ、所謂「女々しい」という言葉に当てはまる女の子のほうが、圧倒的に少ないんだ。このご時勢は。

だからこそ意外なのだ。

「いつそ、俺が涼子の家に泊まればよかったかも……」

なんて呟く俺だが、今更もう遅い。俺は家の鍵を開けて、涼子の中へと促す。もう仕方がないからある程度のワガママは聞いてやってもいいと思ったのは、さっきの料理のせいかもな。

まあそれでも、悪くないさ。

## 抱擁／殺害（前書き）

ここから少々残酷な描写が出ます。というか、今回は濡れ場（！？）とハイパーシリアスが書かれていますので、気持ちを切り替えて読まないで大変なことになります。あしからず。

## 抱擁 / 殺害

が。

流石に同じ部屋で寝ると言われるのは、予想外だった。

俺が襲うわけないと信じてくれているのは嬉しいが、俺だって一介の男子高校生だ。隣で寝ているのが年頃の女の子だと分かっていると、心臓が高鳴ってロクに眠れない。

持参したパジャマを纏う彼女は、とても無防備でかわいらしい寝顔を俺に見せつけるような角度で眠っており、俺はそれをイヤでもじつくりと見てしまうわけだ。……ってか、高校生にもなってまだ、こんな子どもっぽい薄手のパジャマ着てるんだな、涼子。

ちなみに、もともとここ、つまり俺の部屋は、布団二式を引くには少し手狭だ。よって、いくら眠る布団が違うとはいえ、実際のところは隣同士であり、手を伸ばせばそこには、涼子の艶かしい女体があるのだ。いくらなんでも平常でいられるわけがないだろう。

……まあ、涼子の体が艶かしいとはいえないか。どちらかというところスレンダーというやつで、出るトコはそんなに出ていない。って、そんな視点で幼馴染みを見る俺もどうなんだかな。男だから仕方ないだろう。

「(すー、すー、すー)」

俺がこんな状態だとはつゆ知らず、可愛らしい顔で寝息を立てる涼子。そんなに近くに彼女がいることを、あらためて自覚して……。

やべえ、超かわいい。

いままで彼女を恋愛対象に思ったことがないといえば嘘になるが、それでも最近はほとんど気にならなかった。

が、今になってまた思う。かわいい。

もともとそれなりに整った顔立ちなのだから仕方ないが、その無防備な寝顔というのが俺の心を攪っているのだろう。重要なのは「

無防備」ということだ。

やべえ、本気で襲いたくなってきた。

襲うといつてもそんなにひどいことじゃない。ただちょっと体に触りたいというか、その愛くるしいものが傍にあるのを感じたいというか。だめだ、冷静になれ俺！

でも、ちょっとだけならバレないんじゃないか？

よく考えれば彼女は眠っているわけだし、多少つついても起きないのではないか。気付いてしまった。

だめだ。この邪念を止められん。

遂に俺は、その右手を彼女のものへと伸ばしてしまった。ああ、愛くるしい我が女神よ、その麗しの肌を少しだけ、俺の手に、

「……………うん……………」

っ！？

肌に触れかけた俺の手を、勢いよく引っこめる。マズい、気付かれたか！？

「……………あっ……………リン、くん……………」

目が半分開いている。これは 終わったな。ありがとう俺の人生。ありがとう、父よ母よ妹よ。

風のうなりに血が叫び、力の限りぶち当たるとでも言わんばかりの勢いで、彼女の手が伸びてくるように見える。パンチか？ ビンタか？

「いただきます……………ます……………（きゅむっ）」

は？

なんだこの暖かい感触は。伸ばされた手が俺を引っ張ったかと思うと、痛みのかわりにその感触が、俺の全身を包みこんだ。

「おいしいなあ……………」

まってくれ。頬に触れるこの柔らかかなふくらみは何だ？ なぜ彼女の寝息が、俺の額に当たっているんだ！？

「リンくん、大好き……………だよ……………（ふによ）」

「……………っ！？」



「君が彼女にしたことは、それで済むのかい？」

僕はこの時既に、心を失っていた。これは僕の回想であり、この文は、僕の心が落ち着いた時に綴った物だ。

「オレはただ、生意気なコイツに、  
だから、」

「口を開くなあつ！」

このときの僕は、何も思うことなく、その切っ先を彼に向けることが出来たんだ。

「ひいっ！」

涙目になっっている彼に、このときの僕はどんな風に見えたのだろう。鬼、悪魔、怪物、バケモノ……。

なんでもいい。

「お前のその口で、彼女がどれだけ傷ついたのか……分かっているのか！」

切っ先を向けた天叢雲を持つ右手首を回して、切っ先で夕日を反射させる。

「僕は、彼女を傷つけた君を許さない……。許さないんだっ！」

僕はその刀を天井に向けて、一步前が出る。そして、それを振り下ろした。

それとは、「天叢雲剣」。かつて大自然を司っていた神「天照大神」が齎したもので、それは現代までずっと、御神体として祭られていたものだ。それが今回の戦争で、どういっわけか僕の手に降り

た。それまで武器として使われることのなかった天叢雲のもつその能力は、「持ち主の任意で対象物を空間ごと引き裂く」というもの。

このときの僕は憎悪に満ちていて、それはこの時目の前に向けられた彼に対するものだった。憎しみで我を忘れた僕は、怒りで彼を「敵」として認識してしまっただ。

そして。

「……………え、あ……………」

もう、そこには彼の姿はなかった。ただあったのは、天叢雲

によつて斬り裂かれた後の二つの肉塊だけ。

大量の赤い液体が、あたり一面に飛び散つた。僕の体にもその一部が付着し、僕の学生服が真紅に染まる。

斬撃よつてズレを生んだ空間が元に戻り、その際にその肉塊は空間の歪みに飲み込まれ。消えていく。

「はあっ……はあっ……」

そこでやつと、僕は我に歸つた。右手に握つた天叢雲を手放し、両手のひらを見る。真つ赤だ。彼の返り血で。

「うっ……」

強烈な吐き気を覚えた僕は、すぐに嘔吐した。

そしてすこしして、比較的落ち着いたとき。

そのとき初めて、僕は自分が何をしたかを理解した。

「………や………つちやつた………?………」

手から落ちていた天叢雲が視界に入り、その真紅に染まつた刃と、しかし刃こぼれなど微塵も感じさせない光りを放つ全体が、より僕に、事実を強く焼き付けた。

全ての行動を思い出し、狂乱して。

「うわあああああああああああああああああああああああああああ！」

理解した。

僕はこの時、<sup>いま</sup>自分の同級生をこの手で殺したんだ、と。

## 決意 / 邂逅

そして、今に至る。

「セイジ、泣かないで」

僕がそれを思い出していると、その横にいたアラルが、僕の涙を小さな手で拭ってくれた。

「わたしがわるいの……。わたしが……」

「それはちがうよ、アラル」

僕がこの件について涙を流すと、そのたびに彼女を傷つけてしまう。分かっているのに泣いてしまうのは、僕が優柔不断だからなのかな。

「僕の心が弱いから、僕は泣いたんだ。……ごめんね」

「そんな、だったらあやまらなくても……」

「ううん、ごめん。僕は謝らないと、自分を保てないんだ」

自分で自分が嫌になるよ。なんで僕みたいな弱い人間が、こんな現実を歩んでしまったのだろうか。

……いや、それはもう考えないでしよう。何度も考えたし、そのたびに泣いた。もう、泣くことに僕への慈悲はないし、そもそも考えたところで答えなんて出ない。

「行こうか、アラル」

「うん……」

考えたところで、僕の人生に変わりはない。もちろん、運命が変わることも。

だったら、戦うだけだ。

「次は、ブリーナーナクだ」

……。

「はッ！ 俺は何を……？」

気が付くと俺は、抹茶を淹れていた。母親が茶道教室をやっている影響か、無意識のうちにシャカシャカシャカ……。どうしたんだ俺。

ふと見ると、ここはリビングだった。涼子が来る前は食器で散らかっていたシンクが、買った当時と変わらない光沢を放っている。

……無意識のうちに、家事をしていたようだ。

「ああ……、だから俺は「変わってる」とか言われるんだよなア……」

今時、無意識に家事をする男子高校生がどこにしよう。……まあ、ここにいるんだけどな。

「でも、いいことだと思うよ？」

「え……そ、そうか？」

「うんっ。かっこいいよ！ ひゅーひゅー！」

「いやア……、そんな……、たいした事ではないザマスよ……」  
おっと、つい親父の口癖が。

って、そっちじゃねえ！

「っ！ 誰だ!？」

誰か、俺の近くにいます!？」

「あ、こんにちわっ」

そう思っで見渡してみると、そこに小さな女の子がいた。

「わたし、太陽弾タスラムって言うの。よろしくねっ」

「うえ？ あ、ああ、よろしく……」

本当に「小さな」女の子だ。体のサイズはアクションフィギュアほどで、全長約十センチ足らず。しかも宙に浮いている……。

「……」

よく考えてみると、絶句した。なんだこの生き物は。小人？ い

や、浮いてるから……妖精？

「お前、いったい……」

少しして、俺が二の句を告ぐとすると、

「わたしたちは、妖精少女<sup>ヴァレインナス</sup>」

「あつ、ブリユーナク！」

「っ!？」

目の前にもう一人、小さな女の子が現れた。

「次期戦女神決定戦の参加を義務付けられた、武器の妖精<sup>バルテノンウォーズ</sup>」

「そうそう」

「ぱ、ぱるての……、」

「ちよ、ちよつと待ってくれ」

不思議なワードを沢山聞いた気がする。なんだそれ。それとこの二人はどういう関係なんだ？

「何なんだ、お前達は？ そもそも、これは一体どういう現象なんだ？」

意味が分からん。さっぱり意味が分からん。

しかし俺のそんな様子をよそに、後から現れたほうの小さな女の子は、

「わたしたちは、妖精少女。次期戦女神決定戦の参加を義務付けられた、武器の妖精」

同じことをいいやがった。

「そうじゃなくてだな。……えっと、悪いが一から説明してくれ。」

今の俺には、お前達が何を言っているのか分からん」

俺はそう訴える。だが、

「わたしたちは、妖精少女。次期戦女神決定戦の参加を義務付けられた、武器の妖精」

「いや、だから一から説明を……」

「当初から、一から話してる。わたしたちは、妖精少女。次期戦女神決定戦の参加を義務付けられた、武器の妖精」

会話がかみ合わない。

「じゃあ、ゼロからの説明をしてみてください」

ちよつと言葉を変えてみた。さすがにもう同じことは言わないだろう。

「ゼロからと言われても困る。ゼロとは無。無の存在を認識するには無しかなく、故に無以外の言いようがない。概念上の問題」

が、なんと小難しいことを言いやがった。

「わたしたちは、言語以外の方法で人間とコンタクトすることは出来ない。故にわたしにはあなたに、この思考的概念を理解へと導く術を持っていない」

……うむ。これは日本語なのだろうか。だとしたら、コイツは広辞苑でも暗唱しているのか？

「よってわたしは、あなたにゼロを説明できないと、ここに確信を持って断言できる」

そして、そう言つて一息つく彼女。そこに、それを隣で聞いていた、先に現れたほうの小さな少女が、

「あの、ごめんね。ちよつと無愛想に聞こえちゃったかもしれないけど、ブリーナクは悪くないの。彼女はちよつと……人と触れ合うのが下手で……」

「不得手ではない。わたしがそうしたくないだけ。手段としては心得ている」

「……」下手じゃなくて、わたしはそうしたくないの。やろうと思えばできるよ……？ だったら、なんで？」

「……」感情的問題。個人的に深く振り下げられることを拒否する」

「……ふうん……？」

……そして、俺は置き去りである。

その後も、二人でなにかひそひそと呟きあいはじめた。俺はその様子を見つめなっていたが、やがて耐えかね、罪悪感はあるものの、口を開いてみた。

「……えっと、俺はどうすればいい？」

すると、先に来たほうが慌てたように振り返り、  
「あっ、えっと……わたしが説明するね」

## 仲間／伝言

バルテノンウォーズ  
次期戦女神決定戦。

僕がアラルとであったキツカケは、この単語だった。

それは、アラルのような妖精少女ヴァレイナスを女神にするための戦争で、僕達はその手伝いをする役割にある。彼女たちが母体としている武器を操って戦い、負けた者のヴァレイナスは女神の候補から脱落する。そうして、最終的に勝ち残った一人の妖精少女が、次の女神になるんだ。

そして、その妖精少女のパートナーとなっていた人間は、絶対神の持つ全知全能の力の一部を手に入れられる。事実上の神になれるんだ。

つまりコレは、文字通り「神」になるための戦いなんだ。

「僕は、死んだ妹を蘇らせたい。だから戦うのさ」

そうして、僕は目の前の少女にそれを告げた。

「ふええ…、それが星次の本心だったんだ」

その少女とはアラルではなく、僕の正面でチョコレート菓子を食べている、同年代の女の子。

「がう、あたしてつきり、腐った世の中に復讐するんだとか、そんなことを言い出すかとおもったよ」

赤いチャイナドレスを身に纏い、後ろ髪をリボンで束ねた女の子。「アンタもいろいろ、大変なんだね」

頭屋わかほ。僕の親友であり、同志だ。

「だからって、神になることを譲ってはくれないだろう？」

「当たり前じゃんっ、あたしだって、もとの時代に帰りたいのさ」  
彼女は僕とは生まれた時代が違う。何か起きて、彼女は千年以

上も昔からやってきたんだ。その理由は分からないけど、彼女は自分が生きていた時代に帰りがつているのは確かだ。

「でも、どっちかが神になれば、なれなかったほうの願いを叶えてあげるんだよね？」

「うん。それが、僕らの協定だからね」

「それなんだけどさ、」

彼女は「がう」と言っつて、一拍おいた。ちなみに、彼女が事あるごとに「がう」というのは、ただの口癖だ。

「アンタはさ、あたしが裏切るかもしれない、つて考えないの？」

……おかしなことを訊くね。

「それは僕も思っつてることさ。君だつて僕を信じてくれてる」

そういつと、彼女は「がう、そうだけど……」口ごもる。

「それでいいんじゃないかな？ 裏切るのには理由が要るけど、信じるのに理由はいらぬい。それでいいのさ。……そう思えば、こんな世界でも優しく見える」

でまかせに言っつた言葉だつたけど、彼女の心に響いたようつで、「がう、なんか、ここがあつたかくなるね……」

そう言っつて、自分の胸を右手で押さえていた。この場合の「がう」は、肯定の意思だろつ。それぐらいは付き合いの長さで分かる。

「おつ、めずらしくセージがいい事言っつてんじゃねえか」

そんな中、わかほの耳から、彼女とは違つ別の声が聞こえた。

「キコイ！」「めずらしく」は余計だよ！」

その言葉にいち早く、それまで黙つていたアラルが反応する。と、わかほの耳から、彼女のパートナーの妖精少女であるキコイが、その中から出てきた。

「おー、アタイの予想通りの反応だなあ。いつまでもラブラブなこつた」

「そんなんじゃないもんつ！」

「おー、こわいこわい」

ぶくつと頬を膨らますアラルの前で、降参だといつかのようつに両

手を広げるキコイ。

「まあ、なんでもいいよ、あたし」

そこで再び、わかほが会話に参加してきた。

「でもキコイ、あんまり茶化しちゃだめだよ？　あたしが星次と気まづくなっちゃうからさ」

「まあ、マスターがそう言うのなら、アタイも別に楽しくもねえし、止めっけどよ」

「じゃあ最初からやめてよっ」

三人が会話を進める中で僕はというと、我ながら恥ずかしい事に、何も言えないでいた。アラルがそういう感情を抱いてなかったら話は別なんだけど、実質彼女から好意じみたものを感じることもあるて、下手に発言すると彼女を傷つけかねないと思ったんだ。

そう、僕が自己分析していると、

「がっ、じゃあ、」

わかほが立ち上がった。

「あたしそろそろ、買い出しに行ってくるよ」

「あ、うん。言ってるっしやい」

僕がそういうと、わかほは「キコイ、行くよ」と言ってキコイを呼び寄せ、彼女を武器の姿に変える。

如意金箍棒。通称「如意棒」。

中国の伝説「西遊記」で、孫悟空が使用したとされる伸縮自在の棒。もともとは武器として使われなかったものを、孫悟空が武器として使うようになり、以降は多くの人に武器として認識されるようになった。

刃や銃口などといったものがない純系の「打撃系武器」で、漢流武術を得意とするわかほとは愛称抜群の武器なんだ。

その長さはわかほの背丈ほどで落ち着き、その柄が金色に光る。

「ついでに、ブリューナクをさがしてみるよ」

そう言っつて、わかほは窓から飛び降りた。

「あばよ、ラブラブカップル！」

「なっ……！ ちがうもんっ！」  
キコイ……。微妙な空気を作っていないでよ……。

□

あっ、なにこれ、もう撮ってるの？ もー！ 早く言ってよタスラム！

あ、えつと……こほんっ！ その人間さん、はじめまして！ 現役の戦女神、アテナ一世です。

今回あなたには、「次期戦女神決定戦」というものに参加してもらう事になりました！ おめでとう！ この……ビデオって言うのかな？ とにかくコレを見ているあなたは、その太陽弾タスラムに選ばれ、妖精少女使い（ヴィレイナスマスター）として戦う使命を科せられました！ 私から！  
具体的にどうすればいいかって言うよね、その子を使って、他の妖精少女使いを倒すの。ガチで戦って、勝ち抜いて、最後まで勝ち抜いた一人の妖精少女が、私にかわって次の「アテナ」になるの。そういうこと。

……え？ あなたへの見返り？ 勿論あるよ！ 最後まで勝ち残った妖精少女使いは、私の父親「ゼウス」から、ちよつとだけ全知全能の力をあげる！ ちよつとつて言っても父様の力だから、その気になれば世界征服とかでも出来ちゃうんだよ！ 使用回数の制限もないから安心ね！

そんなわけで、頑張ってね……

□

「うん、こんなかんじ〜」

こんなかんじ〜、だ、そうだ。

## 誤解/制裁

「ふむ」

よし、頬を抓ろう。……痛えな。夢じゃないのか。

「というわけで、お願いします」

ぺこりと頭を下げる、小さな少女。

「だが断わる」

「えっ？」

タスラムと称していた彼女は、俺の言葉にそう反応した。

「そりゃあ、いくら見返りがあるとはいえ、何のとりえもない一般人が、いきなり「戦争をしてくれ」って言われて「ええいいですよ」なんて言う訳ないだろう？」

そんなことを言うやつがいるとすれば、そいつは用兵か、もしくはヒーローへの憧れとか好奇心とかで賛成する愚直な奴だ。

前述したが、俺にはとりえはない。まだ舞踊系統の習い事をしていたりすれば、団体ヒーローみたくダンスや新体操を模して戦えるかもしれないが……。

「そういうわけで、他人を当たってくれ」

そう言っつて、テレビの前から移動する俺。いままでタスラムともう一人の小さな少女によって渡されたビデオテープ見ていたが、その内容が先ほど述べたものであり、俺には関係ない。

と、思ったんだがなァ。

「待って(ごっ)」

「うおっ？ あだ！(ごっん！)」

俺は足元で何かにぶつかり、派手に転んでしまった。

「いてて……」

俺が頭を抑えながら足元を見ると、タスラムではないもう一人の小さな少女が、俺の足をつかんでいた。こいつに躓かされたのか？  
「理解力の無い人間は嫌い。ビデオをちゃんと見てたの」

顔が疑問系だというのに、その声色は断定的だ。無愛想な奴だとは思っていたが、これほどとは……。

「アテナ様は一度も任意的表現を使っていない。よって、あなたに選択余地は無い。事実上不可能なので自分勝手ではない事を言っても、現実的意味として現状を変えることは無い」

「えっと、『アテナは一度も』なつてもいいよ」とは言っていないから、あなたが決めれることじゃないの。できないことを言われても何も変わらない』……。ちよつと言いすぎだよ、ブリューナク」

こいつ、ブリューナクという名前か。以後はそつちで称そう。

いや、それよりも、

「選ぶ権利はない、ときたか」

なんともまあ、不条理というか……そんな話だ。

「めんどくせえなア……。じゃあアレか？ 俺はお前らを使って戦うための、お前らが神になるための前座でしかないってか？」

「そ、それは違うよ」

「否定はしない」

二人して言ってることが真逆なのだが。

「ブリューナク、その、なんか無愛想な言い方、やめようよ」

「善処する」

「えー……」

……。ふむ。まあとりあえず、現状の整理をしよう。

俺はなんか、こいつらと戦って勝ち進んで、こいつらを神にしないではいけないらしい。しかも拒否権なし。……こんなところか。わりとあっさりした内容だな。言っていることは以上だが、それにしたって異常すぎる。例えるなら、上司からから無茶な仕事を押し付けられているようなものだ。仕事とは違いそこには使命感もクソもないのだから、余計に夕チが悪い。

「……………んで、」

と、俺をそつちのけで会話する二人の間に割って入

「がおーっ！ 見っけ！」

れなかった。突然リビングの窓から、変な少女の顔が飛び込んできた！

「ブリューナク！ 今度こそあたしと一緒に来てもらおうよ！」

靴を履いたままりビングに上がろうと、窓のレールを飛び越えて、  
「え！ あれーっ！」

真下にあつたシンクに落ちた。

「がっびーん！」

へんな格好で尻を押さえる少女。……よし、とりあえず。

「バカか……」

と、言ってみた。すると少女はその言葉を聞いて俺をキツと睨んで、

「ふんっ！ バカって言うほうがバカなんだよーだ！ バーカ！」

……何故だろう、ツッコむ気にもならない。

「とりあえず、お前、大丈夫か？」

なんか、ずっと尻を押さえていてかわいそうにおもえて、俺は彼女に近づく。が、彼女はそんな俺をどう見たのか、急に体を起こして、

「がう！？ さては弱ってるあたしを襲うつもりだな！ あたしがかわいいから！」

「いや？ 全然全くちつともそんな気は起こらん」

まあたしかに、正直ちよつとかわいいかもなんて思ったがな。ちよつとだけさ。

「がっびーん！ ハッキリ言われたあゝ！」

やましい気持ちが起こらなかったのは確かだ。

「……って、アレ？」

落ち込んだ少女は、すぐに俺とブリューナクの顔を見比べて、

「まさか、キミがブリューナクのマスターに？」

切り替えが早いな。そして、その認識は違う。

俺がそう言おうとして、

「……………（ギョッ）」

「ん？」

俺の右腕が、とても小さな力で握られたことに気付いた。プリユ  
ーナクが、その小さな手で俺の腕握っている。

「…………… たすけて、マスター」

「や、俺まだマスターとかになるつもりじゃな」

「やっぱりそうだったんだ！」

うえ、なんか誤解された！？ そう思う俺の傍ら、

「そう、この人間、九条凜人が、わたしたちのマスターなの！」  
タスラムが、プリユーナクのように左腕を握ってそう言った。

「だから違えし！」

反論する俺。

「…………… え、違うの？」

「ああ、違う違うー！」

「やーん、マスターわたしたちを売るつもりー？」

「言い逃れは出来ないと思う」

「がうう！ あたしを騙したな！ 許さないぞ！」

…………… なんだ、この展開。

正義の味方になりたかつたつもりはない。でも僕は、いつも自分  
が正しいと思つた行動をとってきた。

女の子をいじめる同級生からその女の子を庇つたのは、僕が正し  
いと思つたからだ。その結果、僕が学校と世間から孤立したのも、  
別に悪くはない。僕は正しいと思つた行動を取つたに過ぎないのだ  
から。

その末路が、同級生を醜い肉塊としか呼べない物へと変えてしま  
つた現在へと繋がっていても。

でも、心に後悔がないとはいえない。彼や彼女、そして僕のため

に、他に別の方法もあったかもしれないから。

しかしそれは、いざやってしまった今だから言えること。

だから、

「きみ、何をしようとしているんだい？」

「！」

僕は今、ここに立っている。

「なんだ、ガキか……。おじさんは今、大事なお仕事你真つ最中なんだ。邪魔しないでね」

「人の住宅に油をまくのが？ 変わったたお仕事だね」

目の前に立っている中年の男性の顔色が、急に変わった。

「てめエ……。いつから見えた!？」

血相を変えて怒鳴る中年。僕はそんな様子を見つめて、少し悲しくなった。

「きみが三軒目の放火をしていた時だよ」

僕の発言を聞いた彼は、ポケットからナイフを取り出して、僕に向けた。

「てめえ、チンコロする気か？」

「しないよ」

「まさか、既にやったんじゃないだろうな！」

「していないよ」

「そうか……」

彼は、僕に刃物を向ければいいとおもったのか、僕の首を狙うようにその小さなナイフをかざし、

「なら、悪いがここで死んでもらうぞ」

嫌な笑いととも、じりじりと歩み寄り始めた。

彼が、手を伸ばせばナイフが僕に届くくらいの距離にまで近付いたとき、僕の後ろに隠れていたアラルから、天叢雲の鐔を受け取った。

「ウヘイクアマシツツノミツノシメノシメ機動・天叢雲劍」

そう言った僕の右手に、アラルがしがみつき、そこに天叢雲劍が

現れた。

「なっ……！？」

その間、およそ二秒ほど。ほぼ突然に近い速度で現れた天叢雲の前に、中年の男性はたじろいだ。

「そんな小さなナイフで、僕が慄くともおもったのかな」

僕はそういいながら、彼に天叢雲の刃を向ける。彼はまた血相を変えて、右手からナイフをこぼれ落とした。

「わ、わかった……、降参だ……っ」

彼は後ずさりしながら、僕から距離を取る。

「ふうん？」

僕は、天叢雲の現出時に僕の左腰に現れた鞘へ、それを収める

「なんてな！」

フリをした。

中年がジャケットの内側から拳銃を取り出して、その銃口を僕に向けて引き金を引いた。

けど、

「無駄だよ」

その弾丸は、僕の目の前で真っ二つに切り裂かれた。

「なんだと！」

彼は慌ててさらに数発の弾丸を穿つ。けど、その全ては先ほどのように、真っ二つになって僕の足元に落ちる。

「てめエ、一体何を……っ！」

彼は何かを言いかけて、やっと僕の手元に気が付いた。

「まさか、全部斬ったのか？」

「まあね」

そう。僕は彼の弾丸が僕にせまるまでの間に、天叢雲でその全てを斬ったんだ。一発目は居合い、そのほかは全て太刀で。

「そんな、だがその剣には弾痕もないし、空気を切る音も……」

「弾丸と君が、低レベルなんじゃないかな？」

「っ！なんだとこのオ！」

さらに数発の弾丸を撃つ彼だけど、僕はそれが全て見えるし、斬れる。右腕一本動かすだけで、簡単に斬れるからね。

「くっ、弾丸切れかよっ！」

「気は済んだかい？」

彼が意味もなく銃の引き金を引くけど、そこからはもう弾丸は出ない。そんな様子をみた僕は、天叢雲の切っ先を彼に向ける。

「ま、参った！ マジで！ 頼む、い、命だけは……！」

両手を挙げて必死にそういう彼だけど、僕は最初から、聞く耳など持っていない。

切っ先を一度振り上げた僕は、その空間ごと彼を斬った。

「君が火をつけた家の中には、そんな命乞いも出来ずに逃げ遅れて死んだ人もいるんだ。今更虫が良すぎるよ」

同級生を斬った事に苦しみを覚えたのに、それが他人で凶悪犯だからという理由で簡単に絶つことが出来た僕が、言えることではないのかもしれない。

ただ、僕はこの正面の肉塊を、かつての姿を思っていたわること出来なかったのは確かだ。また一人、僕は僕の正しいと思った行動で、人を殺めたんだ。

悔いは微塵もない。これは正義なのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6871z/>

---

天蓋のパルテノン

2012年1月6日14時46分発行